大分県立美術館教育普及室
http://www.opam.jp
http://www.facebook.com/OPAMeducation

びじゅつって、すげぇ! 2022-2023 Vol.1

美術で遊ぶ、美術館。

大分県立美術館教育普及室

びじゅつって、すげぇ! 2022-2023 Vol.1

美術で遊ぶ、美術館。

大分県立美術館教育普及室

目次

……ワークショップで遊ぶ 3

……教材ボックスをめぐるワークショップ＆レクチャー 5

……朝のおとなの1010講座・夜のおとなの金曜講座 6

……色材パフォーマンス 9

……工作ワークショップ 11

……カオカオ・ミュージアム 12

……自分だけの面白いお面をつくろう! 付録

……らっぷ・らっぷ・すけーぷ 13

……カオカオ・すけーぷ 15

…手を動かして展示室に行く 16

…アクションペインティング・てんてんから始めよう! 18

…サポーターとつくるアトリエ・ミュージアム 18

……体感ワークショップ 19

……積み紙の街 20

……からだを動かして展示室に行く 21

……壁画作戦「海の生き物を描こう!」 22

びじゅつって、すげぇ! 2022-2023

美術で遊ぶ、美術館。

アソブビジュツカン

23 触る・触れるワークショップ……

24 触ると触れる〜視覚と触覚を楽しもう……

26 眼で触る……

27 出会いのワークショップ……

28 アーティストとの出会い……

31 妖精との出会い……

32 作品との出会い……

33 先生のためのワークショップ……

35 触ってみたくなる素材と形態〜［Hands on Works］の青木美歌……

ワークショップで遊ぶ

大分県立美術館
学芸企画課 教育普及室 室長　榎本寿紀

大分県立美術館は開館当初より、心の遊び場としての美術館を謳い、五感で楽しみ、出会いによる新たな発見がある美術館を目指している。そこで教育普及では、美術館が驚きと出会う場所となるように、身近なモノ・コトに目を向け、身体や感覚を刺激するワークショップを開催してきた。好奇心を触発されると、モノを視るのが楽しくなり、自分自身の身体と感覚が目覚めていけば、遊び場としての美術館を楽しめるからだ。自分の視点を獲得する。視ることを楽しむ。そのためのきっかけづくりに重きを置き、「美術で遊ぶ」「びじゅつかんの旅」「美術体験」という言葉を使っている。

ここで改めて「ワークショップとは何か」を確認したい。ワークショップの定義は、さまざまかも知れない。美術館での教育普及を、より活動的にと、全国の美術館がワークショップという言葉を使い始めた時代がある。今から30年以上前のことだ。その頃は、軍手やツナギなど、作業着的な物を売っているお店なの?と言われたり、直訳した「工房」という意味合いからか、モノづくりに関わることと捉えている人も多かった。

しかし美術館の教育普及におけるワークショップは、なにもモノづくりに特化した活動を指すのではない。実技造形講座のように教える・教えられる関係ではなく、双方的なコミュニケーションによる新しい発見と出会いの場だ。そういうと、宗教と間違われるかも知れない。どういう活動なのか、なかなか伝わらず、得体の知れないものと思われることも少なくない中、多くの美術館やアーティストはワークショップ活動を続けてきた。時代の変化とともに、現代美術・アートという言葉を一般の人が目にする機会が増えるなど、言葉の意味や使われ方は変化し、広がっていく。ワークショップという言葉も、いつしか多くの人に知られるようになったが、その意味はどうだろう。やはり何かをつくることと捉えている人は、まだまだ多いのではないだろうか。

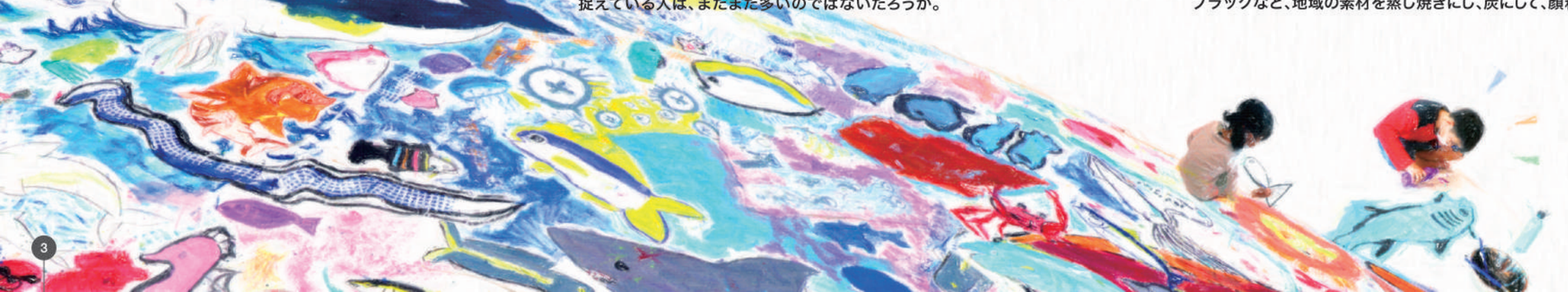
OPAM教育普及のワークショップは、何かをつくる(あるいは描く)ことのみの活動とは、開館当初から考えていなかった。自問自答という内面的思考やセルフ・エデュケーションも含め、同じ場所と時間を過ごすことで何かが生まれてくる活動、というかなり広い意味として使っている。つまり能動的体験の場であり、進行の中で具体的に描く・作る・造る行為を含む場合もあれば、そうでない場合もあるということだ。そしてそこには身体と感覚が必ず関わってくる。このような考えから、「ワークショップとは何か」との問いに対し、身体と感覚を使っての「遊び」と言うことにした。

さて、自分の視点をもち、視ることを楽しむためには、身近にある美しいモノの存在を知り、日常の再発見を促すことが大切だ。そこで県内全域の自然から“美のカケラ”を集めた教材ボックスの制作を、美術館準備室時代より始めた。大分県の自然・環境・風土・歴史・文化を美術的視点でとらえ、県内の自然から採集した実物標本のほか、さまざまな素材・色材・道具を、「鉱物」「植物」「炭酸カルシウム」「素材と技術」という4つの箱にまとめ、触る・触れる教材[Hands on Works]を加えた。視るという好奇心を触発し、日常から美術の世界へ入るきっかけになればと制作し、作品鑑賞の際、能動的な視線を生み出すための補助教材として、ワークショップに活用している。

教材ボックスの中から、もう少し詳しく見てみよう。絵の具の色名には、その絵の具の元となる材料からつけられたものがある。例えば茜色はアカネの根で染めた色をさす。それではと、地域ならではのモノ、身近なモノを素材とした絵の具づくりを始めた。幸い大分県は、地質上、海山川で拾える石は色彩豊かだ。砕いて顔料をつくり、これに展色材(接着剤)を加えれば、絵の具になる。そしてボーンブラック(牛骨)、アイボリーブラック(象牙)にちなみ、関サバボーンブラック、姫島車エビシェルブラック、豊後梅ブラックなど、地域の素材を蒸し焼きにし、炭にして、顔料をつくる。あるいは道端の菜種や松脂(まつやに)を燃やして煤(すす)を集め、墨をつくる。植生も豊かなので、植物染料としての染色材料はヨモギから日本茜まで事欠かない。紅花や藍は自生していないので、ワークショップ参加者と一緒に育てた。さらにイタボガキから胡粉(ごふん)、アカニシ・イボニシから貝紫、イカ墨からセピアと、動物系の絵の具制作も行い、豊後牛からプルシャンブルーをつくってみた。まさに地域資源はそのまま絵の具となり、多くの人たちの好奇心を刺激し、身近なモノに“美のカケラ”があることを再確認することになった。

こうした教材を、より楽しむための講座を開催しているが、それは一方的に話をするのではなく、ときには資料に触り、制作も交え、できたモノを見せ合い、進める。そこでは話すというより喋るといった方が、より実際のニュアンスに近いかも知れない。このようなワークショップ形式のレクチャーから、さらにさまざまな出会いを求めると、自然と他分野・多分野のワークショップ・レクチャーへつながっていった(Vol.2 p.3-4)。そして視る・聴くワークショップに加え、身体を使って遊ぶ体感型のワークショップ、触って遊ぶ工作系ワークショップ、絵の具をダイナミックに使って遊ぶワークショップなど、いろいろな遊ぶワークショップを開催している。

遊ぶことは大切だ。学びの場としてではなく、遊びの場として美術館に来てほしい。身体と感覚を活性化させる体感ワークショップや、好奇心を触発し、歴史や文化、素材や技術を知る講座を体験してほしい。それは身の回りにある美を発見する、自分の視点を持つことにつながるはずだ。さまざまなワークショップを開催し、身体と感覚を目覚めさせ、自分のまわりの「すげぇ!」に気づいていきたい。ワークショップはつくるだけではなく、遊ぶものだから。



日常から美術の世界へ

OPAM教育普及の教材ボックスは、視るという好奇心を触発し、日常から美術の世界へ一歩踏み出すきっかけになればと制作した。しかしモノだけ集めても、自分なりの見方や楽しみ方、自分の視点をもてないと、その美しさ、魅力には気づかない。そこで視るワークショップ、聴くワークショップとして、開館早々の朝10時10分から始まる「朝のおとなの1010講座」、仕事や学校帰りに気軽に立ち寄れる「夜のおとなの金曜講座」を開催している。「視るは楽しい教材ボックス」「大分県から絵の具をつくる」「美術からみた文化」「素材と技術」の4つのテーマに番外編を加え、日常の中にある美術や美術作品を取り上げるワークショップ形式のレクチャーである。さらに「色材パフォーマンス」として、教材ボックスの制作や絵の具の成り立ちを見てもらう実演とともに、色彩にまつわる自然や美術の話を行っている。この講座に参加することで色に対する興味が広がり、コレクション展や企画展で作品を視るきっかけの一つになれば嬉しい。

sugee Box

朝のおとなの1010講座
夜のおとなの金曜講座

視るは楽しい教材ボックス

普段は公開していない教材ボックスの中身やその詳細を紹介

「どど～んと見せます! 天然染料」❶❷
—朝のおとなの1010講座—

大分県内の植物を採集し、染色や絵の具づくりを行っているが、採集できない特殊な天然染料も多い。植物、動物から得られた染料として、紅花・ラックカイガラムシの赤、刈安(かりやす)の黄、紫根の紫、そして染色家・吉岡幸雄氏による日本の伝統色36色の見本などを紹介した。

「岩石・鉱物・宝石」—朝のおとなの1010講座—

鉱物と天然顔料にスポットを当てた教材ボックス「ストーン・ボックス」から、さまざまな岩石・鉱物を紹介。県内で採集した石に加え、ラピスラズリ、アズライト、辰砂、赤鉄鉱、マラカイトの美しさに、みんながドキドキした。

「NUNOの布」❸❹ —朝のおとなの1010講座—

アトリウムに飾られている《ユーラシアの庭「水分峠の水草」》の作家、須藤玲子氏のデザインした布が、教材ボックスには23種類ある。それらの布の素材やスケッチ、織組織などを収納した教材ボックス・ミニから、数種類の布のテクスチャーを見たり、触ったりしながら、楽しんだ。

「Hands on Works～石の魅力」❺❻
—夜のおとなの金曜講座—

昨年度、教材[Hands on Works]に仲間入りした谷本めい氏の作品を鑑賞する。谷本氏は赤鉄鉱、黄鉄鉱など県内の9つの石を使って、海の生き物をモチーフに作品を制作。また植物の化石をモチーフに制作した作品は、ピンクや白など色とりどりの個性豊かな石だった。

「Hands on Works～木の魅力」❼❽
—夜のおとなの金曜講座—

昨年度、[Hands on Works]に仲間入りした横尾哲生氏の作品を鑑賞する。横尾氏は「まろやかなカタチ」をテーマとして、大分県産材を中心に、九州では生育していない木や外国の木も用いて制作している。木の模様や色も個性豊かで、重さや香りも異なる作品群だ。

「タネ・命から立体作品へ」❾❿ —夜のおとなの金曜講座—

植物を美術的視点でとらえた教材ボックス「プラント＆メディスン・ボックス」から、タネを中心に、実体顕微鏡を使いながら紹介した。あわせて[Hands on Works]から、花や実、タネなどをイメージさせる中井川由季氏の陶芸作品、タネをモチーフにカエデの木で制作した横尾哲生氏の木彫作品にも触れた。

「炭酸カルシウムから作品へ」⓫⓬ —夜のおとなの金曜講座—

炭酸カルシウムは、身の回りでは貝殻、卵の殻、石灰岩・大理石、方解石があり、美術の世界ではフレスコ画、胡粉、漆喰壁、鏝絵、石造彫刻に見られる。炭酸カルシウムに焦点を当てた教材ボックス「CCボックス」をみんなで視たあと、[Hands on Works]から、石灰岩で制作した佐野藍氏と方解石で制作した谷本めい氏の作品を紹介した。

「連続の世界・型染」 —夜のおとなの金曜講座—

教材ボックス「マテリアル＆テクニック・ボックス」は、OPAM所蔵作家より、古澤万千子氏と須藤玲子氏の素材と技術、そして表現に焦点を当てている。その中から型染、絞り染、描き染の技法を併用している古澤氏の制作工程見本を鑑賞した。

大分県から絵の具をつくる | 身近なモノから色を得る

「ザ・ピグメント ずらっと集合!」❶❷
—朝のおとなの1010講座—

採取した岩石を細かく砕いて粉状にすると、絵の具のもと、顔料(ピグメント)になる。県内で採集した赤鉄鉱、珪孔雀石(けいくじゃくいし)、辰砂を紹介したあと、実際のつくり方を紹介。10,000色を目指して制作中の顔料を、参加者と一緒に並べ、地域ごとの色の違いを楽しんだ。

美術からみた文化 | 歴史や作品を楽しむ

「美術って何? その2 ただの箱じゃないの?」❸
—朝のおとなの1010講座—

装飾を極限までそぎとったミニマル アートの世界を中心に、「箱」をテーマに現代美術作品を見ていく。企画展「国立国際美術館コレクション 現代アートの100年」に展示されているドナルド・ジャッドの作品を、上下左右、さまざまな角度から見ることを推奨した。

「古い裂(きれ)って、素敵じゃない?」❹ —夜のおとなの金曜講座—

かつては着物や旗として作られたものも、年月を経れば裂のみになって現代に残ることがある。天平の三纈(さんけち)をはじめ、室町時代、江戸時代の布を、技法とともに紹介した。

「箱の中の小宇宙」❺ —夜のおとなの金曜講座—

20世紀の芸術運動、シュルレアリスムの作家たちが多く用いていた技法、コラージュやデカルコマニー、そして箱の中に小宇宙が広がるジョゼフ・コーネルの作品など、企画展「国立国際美術館コレクション 現代アートの100年」の開催に関連して、現代美術について紹介した。

「立体作品を見てみよう!」❻ —夜のおとなの金曜講座—

洋の東西、そして時代によって、彫刻のあり方、考え方は技法とともに変化する。西洋と日本の立体作品を、紀元前から現代まで概観した。

「油絵と洋画」❼ —夜のおとなの金曜講座—

展色材に乾性油を使った油絵の具で描かれたものを油絵という。そして洋画は日本画と区別するために明治時代に生まれた言葉である。油絵と洋画について絵画の歴史を振り返り、さらに油絵の具ならではの筆跡やディテール、匂いとともに、油絵の具の特性に触れた。

素材と技術 | 触覚と技法に注目

「テンペラと油絵」❶❷ —朝のおとなの1010講座—

顔料に展色材を加えると絵の具になる。卵を加えて描くとテンペラ画、乾性油を使うと油絵と呼ばれる。その違いを、実演を交えて紹介する。また[Hands on Works]から、修復家の木島隆康氏が制作したテンペラ画によるフラ・アンジェリコ《受胎告知》の模写と制作工程見本を鑑賞した。

「黒鉛の光」❸❹ —朝のおとなの1010講座—

鉛筆には10Bから10Hまでの22種類がある。具体的な鉛筆の持ち方や使い方の実演を参加者と一緒に行い、硬さの違い、描き方の違い、練り消しゴムの使い方を楽しんだ。また[Hands on Works]から、鉛筆画の超絶技巧と思える小川信治《ロンド6》を鑑賞した。

「繊維素材を視る・触る」❺❻ —夜のおとなの金曜講座—

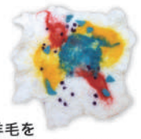
動物・植物・鉱物からなる繊維素材を、実物を見ながら紹介する。代表的な四大繊維、羊毛・絹・麻・綿は、基本的に紡いで糸にしてから、「織る・編む」の工程を経て布へと変化する。さまざまな種類の繊維を視たあと、道具としての綿打ち弓、ハンドカード機、スピンドルを使ってみた。

「石膏 其の一」❼ —夜のおとなの金曜講座—

石膏は、水を混ぜると化学反応を起こし、硬化する特性を生かして、プロダクトデザインから工芸まで幅広く使われている。今回は石膏型取りの工程を、美術部部員の実演とともに紹介した。

「石膏 其の二」❽ —夜のおとなの金曜講座—

其の一の続編。石膏型取りの基本作業は、美術部部員が公開制作を行う。さらに応用として、風船に石膏を入れて固め、卵の殻のようにする、ビニール袋に入れて固める、布に石膏を染み込ませて固めるなどの作業を行い、表現の多様性を紹介した。



「織らない布・フェルト」❾❿
—夜のおとなの金曜講座—

フェルトは別名を不織布といい、湿度と温度変化で絡めた羊毛を縮めてつくる。制作のためにはカーディング(繊維の方向をそろえる作業)が大切だ。カーディングから縮絨(しゅくじゅう/フェルトをつくる作業)まで実演したが、自分でつくってみたいという参加者が多かった。

「ちゃっぴーが視る、井上雅之」⓫⓬
—夜のおとなの金曜講座—

[Hands on Works]にある井上雅之氏の作品は、アウトリーチで持ち運べることを考慮した小作品だが、自身の展覧会では巨大な作品を制作している。[Hands on Works]の作品とともに、夏に茨城県陶芸美術館で開催された個展とアトリエでの制作風景を画像で紹介した。

色材パフォーマンス

絵の具を使った色彩表現と絵の具づくりの実演を、
材料である鉱物・植物・動物の話や、歴史と文化のトピックスを交えて進行する。
色に対する興味が広がり、描くこと、視ることが好きになってほしい。

色彩表現技法

絵の具を使ったさまざまな表現方法として、墨汁を使った表現から紹介する。まずはスポンジを使ってスタンプのようにしたあと、画面を濡らすとにじんだ表情になる。細かくみると、煤の粒子が広がっているのがわかる。

続いて黒く塗った画面にマスキングを施し、アクリル絵の具を使いながら、マーブル模様や絵の具を散らす。水分調節とともに重ね塗りを行い、古城の絵を即興で描いた。

ジェッソを塗った木製パネルにアクリル絵の具を垂らし、割り箸を横にねかせながら混色させる。画面を傾け、絵の具を垂らし、ドライヤーの風と熱で模様をつける。これらの描き方を参加者も一緒に楽しんだ。

磨けば宝石・砕けば顔料

展色材の比較から

顔料に展色材(接着剤)を混ぜると絵の具になる。展色材が膠(にかわ)だと日本画、アラビアゴムだと水彩画、卵だとテンペラ画、そして乾性油で練ると油絵の具になる。昨年度の色材パフォーマンスでは、その種類と違いを解説したが、今回は徹底的に次から次へと実演していった。参加者たちは、言葉や知識ではなく、展色材の違いによる色味の違い、そしてそこから生まれる表現の違いを実感した。

天然顔料の魅力

アズライト(藍銅鉱)から群青を、マラカイト(孔雀石)から緑青をつくるため、まずは教材ボックスにある二つの鉱物をすべて並べてみる。そして金槌と乳鉢で粉砕し#300の布で漉す。日本画では粒子のサイズを変えることで濃淡を出す。さらにこれらの粒子を焼くことで、色味を変えていく。膠を混ぜ、色の変化を楽しんだ。

手の中の触覚を大切に

tede Kousaku

「作る・造る・創る」のが大好きな人のための工作ワークショップは、さまざまな素材に触ったり、つくりながら考えたりと、手の中の触覚を大切にしている。使う材料は、紙や布、糸、針金、アルミ箔、ストロー、木、石などなど、実にさまざまだ。形づくるための「折る・曲げる」という単純な行為の中でも、工夫次第で、自立させることや飛行させることも可能。「切る・貼る」は道具の使い方や接着剤との相性も大切だ。また、「作る・造る・創る」ことと「視る」ことをドッキングさせたワークショップでは、コレクション展示室へ作品を視に行き、アウトリーチでは[Hands on Works]の作品を視たり触ったりと、活動の幅は制作だけに限定せず、広く行っている。手の中で繰り広げられる工作は、複雑で多様な世界だ。

企画展「コシノジュンコ 原点から現点」関連ワークショップ

カオカオ・ミュージアム

「面白いって
面の字がはいっているでしょ
面白いお面をつくってね」

「ひとつとして同じものがないのが面白い」

コシノジュンコさんの「顔がたくさんあったら、面白いんじゃない?」という言葉から、企画展「コシノジュンコ 原点から現点」の開催に合わせて関連ワークショップを企画した。ベースの型紙を組み立ててコラージュ＆ペインティングを行い、さまざまな喜怒哀楽、装飾いっぱいのお面をつくる。目指すは、2階アトリエ＋体験学習室を、部屋じゅうお面だらけにすること。開催回数が多いため、使う画材・素材や技法は日替わりメニューとした。アウトリーチも含めると、計30回以上行った結果、1063個ものお面ができあがった。

コシノさん本人が飛び入り参加してくれた回もあり、コシノさんは自分そっくりのお面をつくって、「付けても取っても同じ顔」と参加者と一緒に楽しんだ。

「大人だって、参加したい! カオカオ・ミュージアム@コシノジュンコ展」
—夜のおとなの金曜講座 番外編—

「大人だってつくりたいし、かぶりたいよね」ということで、金曜講座でもお面づくりを行った。色紙・絵の具・クレヨン・アルミ箔など、多種多様な素材を用意した。

「不思議大好き、お面の魅力」—夜のおとなの金曜講座 美術からみた文化—

カオカオ・ミュージアムで制作した1063個のカオに囲まれながら、音楽劇でつかう伎楽面をはじめ、全国のいろんな面白いお面を紹介した。

カオカオ・ミュージアム@アウトリーチ

出前ワークショップ、びじゅつかんの旅じたくでお面をつくり、すべて展示した。

※大分市立明治小学校、大分市立碩田学園、大分大学教育学部附属小学校、宮河内幼稚園（大分市）

どんなデコレーションにする？

1～4まで4パターンつくってみました。

1 とがった割り箸で紙に凹凸をつけるように描き、上からクレヨンでこすると、線が浮き出てきます。

2 絵の具をダイナミックに使ってみよう。

3 絵の具とクレヨンを使えば、絵の具の水分をはじいてクレヨンの模様が浮き出てくるよ。

4 いろんな紙を使ってコラージュ。折り紙、色画用紙の切れ端、薄葉紙などを貼ってつくります。

みんなのデコレーションを参考にしてみよう

つくり方

- お面台紙の輪郭と目の部分（実線）を切り取ります。
- 切り込みを入れ（実線）、点線まで引き寄せ、ホッチキスで留めます。
- 上下をどちらかに決めて、デコレーションをします。

※上下をどっちにするかで、顔の印象が変わります。
※ホッチキスで留めると立体的なお面になりますが、制作しづらい場合は、初めに色塗りなどをしてから、ホッチキスで留めましょう。

使うもの

お面台紙、ハサミ、ホッチキス
（以下の画材・材料は、必要に応じて）
絵の具、クレヨン、色鉛筆、鉛筆、油性ペン、水性ペン、割り箸をとがらせたもの、スティック糊、ボンド、色紙、薄葉紙、障子紙、アルミ箔、その他

5

お面のベースを色紙にして制作します。

6

手形で模様をつけてみた。

7

クレヨンだけを使ったお面づくり。色をぬった上に黒色クレヨンを重ねて、とがった割り箸でひっかく。ぬったところをティッシュでこする、などなど。

8

色画用紙と色鉛筆でつくります。色鉛筆をねかせたり、立たせて描いたり。ピンクの紙に色鉛筆で青を重ねると紫色に。同系色か補色か、混色の仕方を考えると表現が広がります。

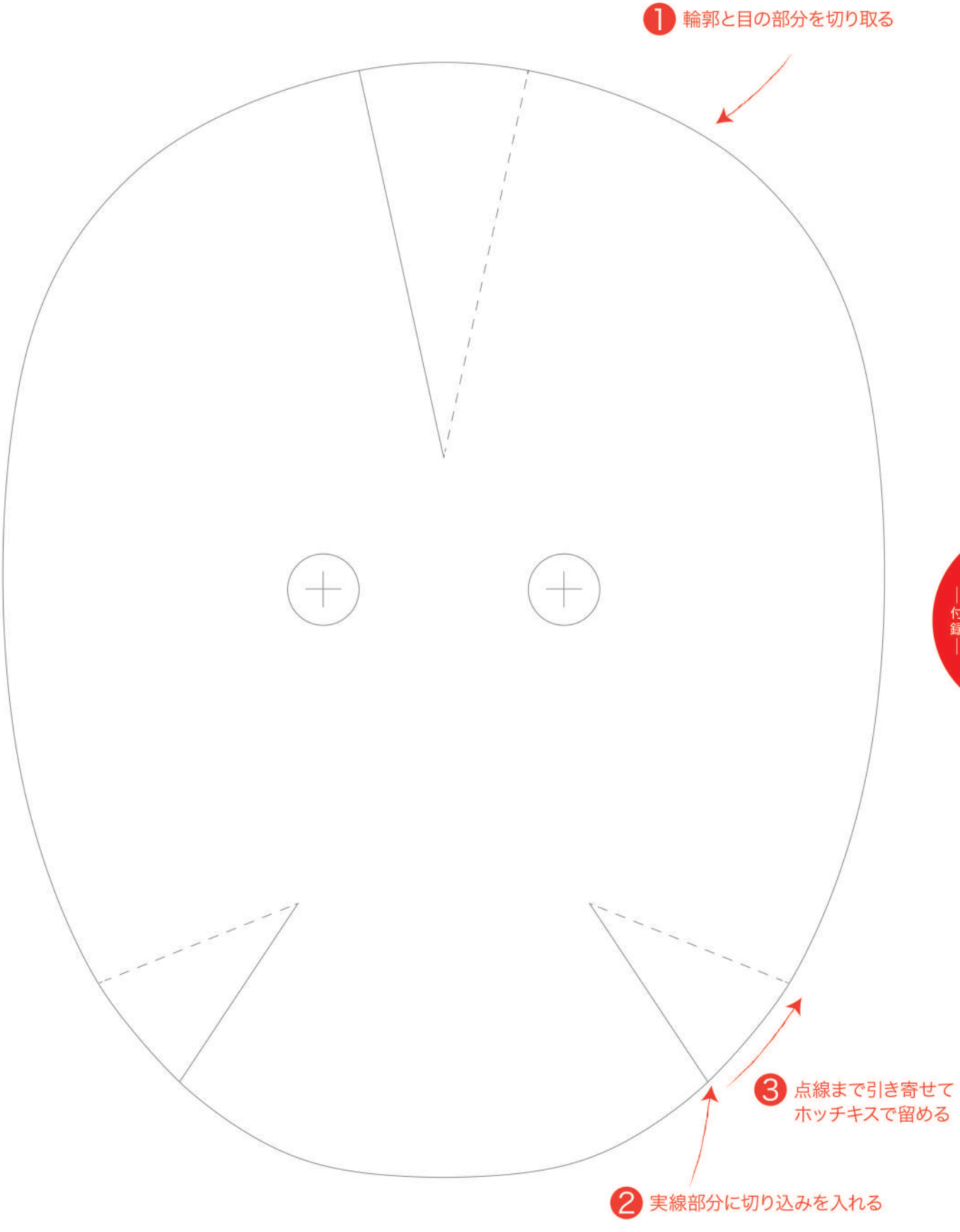
9

ポスターやチラシを使ったコラージュ。同じ紙でも、どう切り取るかでまったく違った印象に。

10

クレヨンやカラー紙テープに薄葉紙、アルミ箔と何でもあり。さらにアルミ箔に油性ペンで色をつければメタリックカラーになります。

自分だけの面白いお面をつくろう!



この台紙をコピーして、お面づくりにチャレンジ!!

つくり方やデコレーションの仕方は、裏面を参考にしてね。

らっぷ・らっぷ・すけーぷ

新型コロナウイルスの流行により、接触を避けるため人との間に立てられるようになった飛沫防止のアクリル板を使って、何か楽しいことができないか、というコシノさんの想いから、ワークショップ「らっぷ・らっぷ・すけーぷ」が生まれた。はじめに企画展「コシノジュンコ 原点から現点」を見に行き、そこで感じた気持ちも含めて好きな色2色を選んで、その気持ちを描く。筆をダイナミックに振ったり、絵の具を垂らしたり、絵の具の流れと混ざり方を見ながらアクリル板を動かした。

らっぷ・らっぷ・すけーぷ OPAM美術部 番外編

昨年度、OPAM美術部が発足した。6〜2月の中で、年間テーマを決めて、月1〜2回ほどワークショップを行っている。今年度も活動は6月からだったが、その前の企画展開催中に、部活継続希望者で「らっぷ・らっぷ・すけーぷ」を行った。コシノジュンコさんファミリーも一緒に参加。コシノさんと中学生は、互いの描き方をじっくり観察し合っていた。

「合成樹脂・アクリル絵の具の魅力」

—朝のおとなの1010講座 素材と技術—

ワークショップ「らっぷ・らっぷ・すけーぷ」で使っているアクリル絵の具って、どんなもの？耐水性良し・重ね塗り良し・乾きは速い。合成樹脂を展色材として使うアクリル絵の具の魅力を、カラーフィールドペインティングをはじめとした現代作家の作品とともに紹介し、アクリル絵の具ならではの表現をしている作品を解説する。「らっぷ・らっぷ・すけーぷ」で制作した作品をみんなで見て、垂れたときの表情、乾いたときの絵の具のひび割れ具合など、実演も交えながら話をした。

カオカオ・すけーぷ

1063個のお面と60枚のドローイング

企画展「コシノジュンコ 原点から現点」関連ワークショップの記録を、一つのインスタレーションとして展示した。アクリル板に描く「らっぷ・らっぷ・すけーぷ」は、計60枚を一直線に、色がグラデーションになるよう等間隔に並べた。パネルに色が映り込むと、さらに作品の見え方が変化する。来場者の中には、絵の具が流れる様子を見て「溶けたアイスクリームみたい」と形容した人もいた。合計で1063個集まった「カオカオ・ミュージアム」のお面は、テグスを用いた吊り下げや壁掛け展示を行った。

「カオカオ・ミュージアム」を行った子どもたちが、「びじゅつかんの旅」にやって来た。1000ものお面に驚き、自分のつくったお面を探す子どもたち。60枚のドローイングが並ぶ作品の周りを歩き回り、いろいろな方向から見たり、何度も行ったり来たりして楽しむ。後日、家族を連れてきた子どももいて、笑顔で自分のお面を紹介していた。出前ワークショップでお面づくりをした子どもたちも家族と一緒に見にきて、自分や友達のつくったお面が見つかるととても嬉しそうだった。

※大分大学教育学部附属小学校、宮河内幼稚園（大分市）、大分市立明治小学校

「コシノジュンコ展、もう一回視るために。」

—夜のおとなの金曜講座 番外編—

会期終了間際、担当学芸員と一緒に会場をめぐる。展覧会場の設営の流れや、コシノさんとのやり取りなど、担当学芸員だからこそ語ることのできる話を聞きながら、見て回った。

「銀職人の花畑」

アルミ箔を爪でこすってピカピカにし、お花をつくったあと、コレクション展「ボタニカル・ガーデン」でお花の絵を中心に見に行く。午後のワークショップでは、午前中につくった花畑がさらに広がった。

「箱をつくることから始めよう!」

世界で一つだけの、自分の箱をつくるワークショップ。たくさんの箱から好きなモノを選び、外側を飾っていく。素材は布やアルミ箔、色紙、毛糸など。アルミ箔は爪でのばして、箱に花を咲かせた。

手を動かしたあとは、コレクション展Ⅰ「コレクションの精華」へ。タイトルを知らずに絵から想像するのがいい。特に上村松園《月蝕の宵》は、一見何をしているのかわかりづらいが、しぐさや持ち物を丁寧に視ていると、どんな場面か想像できる。

みんなの土曜アトリエ

手を動かして展示室に行く

「みんなの土曜アトリエ」は1時間半のワークショップで、午前中は4歳以上の未就学児とその保護者を中心に、午後は小学生から一般を対象に行っている。手を動かしたあとで展示室へ行くことにより、心身ともにリラックスした状態でコレクション作品と接するOPAM定番のワークショップだ。

「箱の中に宇宙をつくる！」

マッチ箱や菓子箱などたくさんの空箱から一つ選び、中に別世界をつくる。材料はふわふわの綿、ピンポン玉、プラスチックのカップ、毛糸、針金など、想像力をかき立てそうなモノを用意した。紙をクシャッとさせたら氷みたい? ペンのキャップと割れたピンポン玉を重ねてキノコタワーをつくる?こうしてできあがった箱の世界に、小さくなって入ることを想像するのも、また楽しい。コレクション展Ⅰ「コレクションの精華」でディテールに注目し、キラキラと光る岩絵の具を楽しんだ。

「電車ごっこGOGO!」

色紙テープとマスキングテープでカラフルな線路を走らせる。ハート型や壁をつたう線路、宙を横断する立体線路など、アトリエ中に線路ができると、積み木でつくった電車を持って走り回った。コレクション展Ⅲ「生命の輝きを求めて」で展示されていた南蛮屏風は、異国の服装や動物に目を奪われた。

「うつわもりもり、彩り小皿」

色紙でお皿をつくり、その上においしそうなモノをつくって、ご馳走プレートを並べた。展示室では 髙山辰雄《食べる》をじっくり鑑賞。食について、思いをめぐらせた。

「未確認飛行物体、現る!」

プラスチックのカップ2つに、内側から窓や乗組員などを描いて、くっつける。ボディカラーにこだわり、点々模様や、虹色など、カラフルなUFOができあがった。地球の周りに吊るして照明を落とすと、暗い宇宙にUFOが光った。コレクション展Ⅲ「生命の輝きを求めて」では、オーギュスト・ロダン《影》を下からのぞき込んだり、同じポーズをとってみたりして楽しんだ。

ころボックス 超特大スペシャル・バージョン

紙管の内側に自分の世界をつくる「ころボックス」の超特大版。大きな紙管を使って転がる箱をつくる。玉乗りみたいに乗って遊んだり、コマのように回転させてみたり、いきなり制作に入るのではなく、素材との触れ合いが大切だ。制作では、紙管を家に見立てたり、四季を描いたりと、思い思いに楽しんだ。

荒川修作の棺桶のような作品《抗生物質と子音にはさまれたアインシュタイン》や、ドナルド・ジャッドの箱だけの作品、ジョゼフ・コーネルの箱の中に別世界が広がる作品などを見て回った。

企画展「国立国際美術館コレクション 現代アートの100年」関連ワークショップ

つくって夢中 あなたもアーティスト

つくったあとに、企画展を見に行きました。

くるんで、ハテナ?

10m四方の布に潜って遊ぶ。中でいろいろなポーズをとると、山のような、岩のような形に見えた。上を歩くと、雲海にいるようだ。長い障子紙を一気に持ち上げて投げたり、広げて部屋じゅうを真っ白くし、最後は切って貼って、自分が包まれる大きな紙布をつくった。

何かが布で包まれている謎の作品(マン・レイ《イジドール・デュカスの謎》)を見て、シルエットの形状から中身を想像した。建物がまるごと布で包まれたクリストの作品では、発想のみならず本当に実現している行動力に驚いた。

どっどど、どどー。

綿棒に絵の具をつけて点々で描くワークショップ。未就学児中心のコースでは、コマにドット(点々)模様をつけ、回転させたときの混色を楽しんだ。小学生からのコースでは、描く紙のサイズを自分で選ぶ。最後に全員の描いた絵を繋げて一つの作品にした。

デカルコマニー&コラージュ

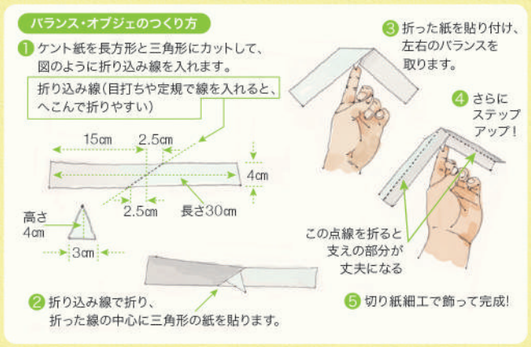
二つ折りにした紙の上に絵の具を垂らしてつくるデカルコマニー(転写技法)をもとに、コラージュ(貼り絵)を加えて作品をつくる。

ゲルハルト・リヒター《抽象絵画(648-1)》や、モーリスルイスの色彩豊かな作品を見て回った。

点で描かれたように見える作品を鑑賞。手を筒にしてのぞいたり、作品との距離を変えたりすると、点に見えていたのは網目模様ということに気がつき、驚いた。

「バランス・オブジェ」 ―出前ワークショップ:臼杵市立臼杵小学校、竹田市立竹田中学校―

バランスを取りながら、やじろべえのようにユラユラと動くオブジェを制作した。対になるモノは具体的なカタチがいいか、それとも抽象的なカタチが面白いか。思いのままに制作できるのがオブジェの魅力だ。



「アクションペインティング・てんてんから始めよう!」

―出前ワークショップ:大分県立大分支援学校―

筆ではなく、身体を使って描く。まずは指先に絵の具を付けて、小さな紙に点々を描く。一つの点が、こすりつけると表情を増す。描いた小さな紙を大きな紙の上に貼り、そこから色と形を広げるように、始めは指先の点で、徐々に手や足を使って、ダイナミックに全身で描いていく。スキージで多色を延ばせば、見たこともない色が広がる。また白い絵の具を足すと、全体の印象もガラリと変わる。だんだんと大胆になるワークショップだ。

サポーターとつくるアトリエ・ミュージアム

OPAM教育普及のサポーター活動は、ワークショップ当日の補助やギャラリーツアーの見守り隊。そして月1回の活動日にはワークショップの準備や片付け・整理のほか、素材を触ってワークショップの内容を一緒に考える。今年度はサポーターが考えたワークショップを夏の「アトリエ・ミュージアム」で実施してみたいと企画を始めた。手を動かしながらアイデアを形にしていき、夏らしいワークショップを考案する。材料、机や椅子の配置、当日の進行について、徐々に話は進み、実施当日を迎えた。

アトリエ・ミュージアム みんなでつくろう!「ギョギョッとサマー! うみのともだち」

アトリエの水場に青や緑のビニールを敷き詰め、海の世界を再現。参加者は紙管、プラスチックのカップ、ストロー、リボンなど、さまざまな材料をバイキング形式で取って、海の生き物をつくる。完成したら、作品を水場に置いて、写真を撮り、海の気分を楽しんだ。

心と身体を動かす

kokoro wo Moyase

身体と感覚を活性化させる体感型のワークショップは、「みんなの土曜アトリエ」をはじめ、春夏秋冬のワークショップ、そして出前ワークショップで、数多く開催している。中でも定番の「ばたふわ」や「ころころピンポン」「リング・リング・リング」「ころころボール」「ぼわんぼわん」などは、小学校や園、ときには中学校でも行い、人気を博してきた(詳細は過去の『びじゅつって、すげぇ!』をご覧いただきたい)。今回は、今までまだ大きく取り上げていないものや、新しく始めたものを中心に紹介する。どれも身近な素材で簡単に遊べ、心と身体を解き放ってくれるので、ぜひ学校や家庭でもやってほしい。美術館ではこうしたワークショップのあとに、展示室へ行き、作品を一緒に視るので、心も身体もリラックスした状態で鑑賞ができる。

積み紙の街 | 出前ワークショップ

単純な遊びの中には、想像と創造が詰まっている。「積み紙の街」は、身の回りにある紙を二つに折って立てる、その紙を積み上げる、という極めて単純なことだけを行う。積むことに集中していたはずが、いつの間にか並べ、囲い、家や壁に見立て始め、無限に想像の街が広がっていく。身近なモノで遊び、身体と感覚を刺激し、感性を研ぎ澄ましていくことが大切だ。

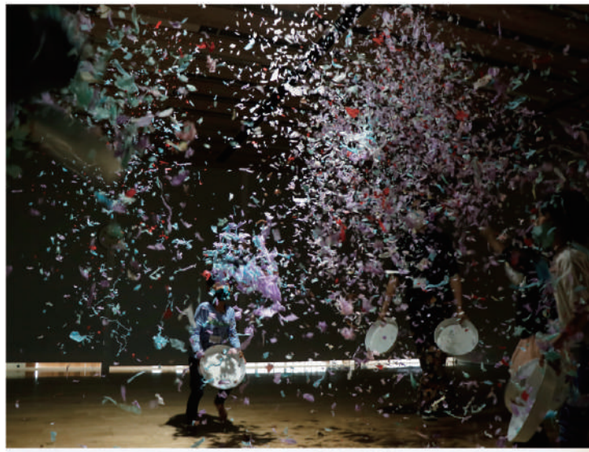
使うもの
紙(広告チラシ、展覧会チラシなど、いらなくなった紙。特に購入する必要はない。美術館では余ったA4サイズのチラシを使用)

遊び方
1. 紙を半分に折る。縦に折る?それとも横?
2. 折った紙を立てる。どっちの方向に立てるかな?
3. 1人3枚の紙を横に折り、重ねて高くする。
4. どこまで高くできるか、紙を増やしてチャレンジ!
5. 積み方、重ね方を自分で考え、さらに並べていくと、自然と街のような形になっていく。
6. 三つ折り、四つ折りと折る回数を増やすと丈夫な構造になる。
7. 最後は、紙を丸めて積み紙の世界をのぞこう。

ここに気をつけよう
- 折り紙遊びではないので、最初は二つ折りのみがよい。
- 紙は厚い方が自立しやすく積みやすい。
- 紙が薄い場合は、ユラユラ揺れる様を楽しむか、折る回数を増やしてみる。

出前ワークショップ | にしきこども園(中津市)、ひまわり幼稚園(大分市)、両川こども園(宇佐市)、しいのみこども園(豊後大野市)

からだを動かして展示室に行く



「おひとり様用、花吹雪」
—みんなの土曜アトリエ—

たくさんの色紙テープを手でちぎったり、ハサミで細かく切ったりして花吹雪をつくる。トレーに入れて、いっせいにまき散らす、あるいはうちわであおぐ。色の組み合わせによって異なる雰囲気になるため、色分けしながらトレーに集めた。最後は透明ビニール袋に入れてたたくと、中の色紙チップが飛び跳ねる。色紙テープとともに薄葉紙も使うと、舞い方が異なって面白い。形によっても舞い方が異なるので、糊でくっつけて花びらの形をつくり、一緒にまき散らした。

コレクション展「ボタニカル・ガーデン」では、屏風、日本画、洋画に描かれた花の絵を中心に見て回った。

「カラフル・プリン」
—みんなの土曜アトリエ—

花吹雪で遊んだあと、カラーチップを集める。ホウキは使わず、手で集め（ホウキを使った瞬間、カラーチップは素材からゴミとなる）、透明バケツいっぱいに入れる。ひっくり返してバケツを取れば、プリンの完成。障子紙を砂糖に見立てて初めに入れ、色を味に見立ててカラーチップを入れていくと、さらに楽しい。バケツのサイズは大中小とあった方がよいが、プラスチックのカップやボウルなど、バケツ以外の容器でもよい。

コレクション展Ⅲ「生命の輝きを求めて」では、展示されていた髙山辰雄《由布の里道》を、距離を変えて視る。近づくと顔料のキラキラした輝きに、離れると描かれたモチーフの位置関係や、朝の空気に包まれた風景に気がついた。

くしゃくしゃ ポイポイ
—出前ワークショップ—

「カラフル・プリン」を出前ワークショップで、もっとダイナミックに行ったのが「くしゃくしゃポイポイ」だ。新聞紙を揉み紙にしたり、細長く切ったり、ちぎってうちわで舞わせたりして遊んだあと、新聞紙すべてをバケツに入れる。ひっくり返すと、巨大なプリンのできあがり。

※臼杵市立南野津小学校

定番ワークショップいろいろ

ぽわんぽわん（千歳小学校）

超ぽわんぽわん（東大分小学校）

今日は積むぜ！
（別府市立中央保育所）

ぱたふわ（竹田幼稚園）

ぱたふわ（どんぐり幼稚園）

壁画作戦「海の生き物を描こう！」

学校の近くにある消防車の車庫に絵を描くプロジェクトの一環で、原寸大の下絵を、全校児童＋幼稚園児が時間をかけて描いた。事前に描きたい生き物のスケッチを持ち寄って集合。描く基本の「見ながら描く」（実物でも写真でも）、「記憶で描く」、「想像で描く」の三本柱。緊張する場合は他の紙に描いてから、ドローイング＆コラージュで描いていく。筆跡の重なり、絵の具の厚み、痕跡などが時間とともに増えていって、離れて見ると迫力があり、近寄ると小さな魚の物語や絵の具の表情が楽しめる作品が完成した。これは絵の具を使うワークショップだが、ダイナミックに全身で描くという点で、体感型ワークショップとして紹介したい。

ぱたふわ（国東こども園）

リング・リング・リング
（ひまわり明野幼稚園）

ころころピンポン（大道小学校）

花吹雪からのカラフル・プリン
（南野津小学校）

ころころボール（日田支援学校小学部）

積みコップ（津房小学校）

触覚と[Hands on Works]

OPAM教育普及では、身体と感覚を活性化させるワークショップを数多く開催しており、中でも「視覚と触覚」は特に多く取り上げている。触覚は、対象物との距離が0になることで温度、重さ、質感を感じることができ、しかも全身で感じることができる感覚だ。生命の存続に関わる感覚であるとともに、生きていることを実感できる感覚でもある。一方、視覚は、対象物との距離があるからこそ感じられ、空間や色彩を感じることができ、多くの人が日常で当たり前に感じている感覚だ。この二つの感覚に関連したワークショップにより、美術の根源である命の問題に近づきたい。また「触(さわ)る」に対して、「触(ふ)れる」には、より対象物への繊細な関わりが必要とされるニュアンスがある。しっかりとした「重さ」を感じるモノ。「触りたくなる衝動」と「軽さ」に加え、触ると壊れてしまいそうな「繊細さ」を感じるモノ。そんな視覚と触覚の関係を再確認するワークショップのために、触る・触れることができる教材[Hands on Works]を集めている。

冬の特別ワークショップ

触ると触れる〜視覚と触覚を楽しもう

視覚と触覚を楽しむために開催した特別ワークショップ。
未就学児から大人まで、「触る」と「触れる」という微妙な感覚を通して、身体と感覚を刺激した。

A 初めての目隠し体験 いろいろ触ってみよう!

4歳以上の未就学児とその保護者を対象にしたコース。手の触覚を研ぎ澄ませて、いろいろなモノに触る。はじめは黒く塗られた3cmの立方体の重さ比べ。どれが一番重いか、軽いかを確かめる。木やプラスチックの重さの違いはわかりやすいが、銅とアルミは微妙なところ。しかし目をつぶって持ち比べると、そのわずかな違いが感じられた。

袋の中に
入っているモノは何?
ドキドキしながら手を入れる。
この瞬間がたまらない。

初めての目隠し体験なので、
4歳のお友達はおうちの人と手を
つないでのスタート。だんだん慣れて
きたら、手を離してゆっくり歩いて
みる。音がする方に向って歩くのが
楽しく、だんだん聴覚も
敏感になるようだ。

触覚が敏感になってきたら、OPAM教材[Hands on Works]を触る。はじめはそっと指先で触れる。質感を確かめ、重さも確かめる。底を持ち上げてみたり、中をのぞいたりするのも、普段はできないことだ。このコースは参加申し込みが非常に多く、抽選に外れた子どもたちのために、番外編も開催した。

[Hands on Works]より、井上雅之《SW-177》《SW-179》、中井川由季《依って重なる2》、青木美歌《Series of seed' 2》《Series of seed' 3》

B チャレンジ! 目隠しロング。

小学生から一般を対象にしたチャレンジコース。はじめにウォーミングアップで、袋の中のモノを触ってみる。もしも何かわかったとしても、正解を言ってはいけないのがルール。わかったような、わからないような、ドキドキ感がたまらない。

目隠しをしてアトリエ内を歩き回る。ゆっくり歩くと、だんだんとアトリエのサイズもわかってくる。意外と美術館ではいろいろな音がしていることや、ガラス面に貼ってあるカッティングシートの凹凸にも気がついた。

廊下に展示された[Hands on Works]の作品、橋本真之《上昇》を触る。全体が同じようにスベスベでないことや、穴の中に手を入れても深くて届かないことに気づいた。

3階の天庭周辺も歩く。見慣れた場所だが、距離感がわからない。手をつないでもらって速足で歩くと、今まで味わったことのない不思議な感覚になった。

C

骨を触って、恐竜を知る

視覚による観察には多くの発見がある。しかし重要な情報を得るためには、触察(触覚による観察)も大切だ。国立科学博物館の真鍋真氏によるワークショップでは、「触って気づく」をキーワードに、袋に入っている鳥の骨を触りながらスケッチを行った。すると今まで気がつかなかった多くのことに気づき、その発見をもとに恐竜進化の話が行われた。真鍋氏は「視るだけでは全体像がわからないので、触っての観察は重要」と言う。スペインの画家ミロは、アイマスクをして石膏像を触りながら描写したそうだ。弱視の恐竜研究者が、触ることを中心に研究している事例もあるという。

触覚スケッチ

見るとわかった気になってしまう。まずは触って体験する触察が大切ということで、袋に入った鳥の骨を触りながら、方眼紙にスケッチした。いろいろな方向から描く。同じ大きさでもいいし、大きく描いてもいい。約30分間、触覚スケッチを行った。

中から骨を取り出して見てみよう

袋から出して見る。入っていたのは鳥の尺骨。今度は見ながらスケッチする。観察スケッチにより、触察で気づいたところをさらに見て描く。すると骨にも血管が通っている穴を発見した。参加者同士、骨を比べてみると、大きさは結構違い、動物にも個体差があることがわかった。

左の手羽? 右の手羽?

この骨はどこの骨か。湾曲しているので、断定することができ、そこから全身骨格を想像する。発掘するときは、ただ地面を掘って探すだけではなく、どんな動物のどの部分かを見極めることが、どっちの部分を発掘していけばいいかの判断に繋がっているという。動物化石は体の形がわかるため、掘る方向や範囲を推測できるのだ。

ヴェロキラプトルを視る

1/3模型を視ながら、尺骨はどの骨か、推定する。あわせてスケッチもする。鳥の祖先だったのではないかと言われるヴェロキラプトル。足の爪があることから飛び蹴りをしていた可能性があり(爬虫類はガニ股のためできない)、実は活発だったのでは?骨格の構造から手首が動くことがわかり、その構造は鳥や始祖鳥にもみられることから、恐竜は鳥に進化していき、絶滅していないのでは?と言われるようになった。

骨からわかる羽毛のこと

ヴェロキラプトルの前脚に翼があったというが、羽毛の化石は見つかっていない。ではなぜ翼があったと言えるのか。それは尺骨の外のカーブにぽつぽつと突起物があるからだ。多くの鳥の骨には同じような突起物があり、これは風切羽(かざきりばね)という、羽が付着していた跡である。

骨からわかる脚のこと

骨盤を見ると、爬虫類は股関節が浅い窪みで、大腿部が骨盤の奥まで入り込めず、ひざが胴体の横に突き出してガニ股になる。一方、恐竜の骨盤には穴があり、太ももの骨が深く入るため、ひざは下を向き、コンパスが大きくなり、速く走ることができる。恐竜の一部は進化して鳥になっているので、鳥の骨盤にも同じような穴がある。

骨からわかる雄と雌

骨になると雄雌の区別がつきづらい。ティラノサウルスの骨が中まで詰まっている化石は病気かとも思われた。しかし卵を産むにはカルシウムが必要で、現代の鳥類は産卵期にカルシウムを骨に溜めることがわかった。これは産卵期のメスのティラノサウルスらしいという結論になった。

恐竜から鳥へ

もともと恐竜は地上で暮らしていたが、やがて木の上で暮らすものも現れた。木々を飛び移る、から飛ぶへ。恐竜から始祖鳥へと進化するが、境界線が引けるわけではなく、連続的な進化が起こったと考えられる。

[講師] 真鍋 真 (国立科学博物館・古脊椎動物学)

横浜国立大学教育学部卒業後、イエール大学大学院 修士課程、英ブリストル大学大学院 博士課程修了。国立科学博物館地学研究官を経て、現職。博士(理学)、古生物学者。専門は古脊椎動物学。恐竜など、中生代の爬虫類、鳥類の進化を研究しながら、化石からの進化を少しでも理解しようと、化石と心の中で対話する日々を送っている「科博の恐竜の先生」。著書に『深読み!絵本「せいめいのれきし」』(岩波書店)、『恐竜博士の目まぐるしくも愉快な日々』(ブックマン社)などがある。2022年12月には『真鍋先生の恐竜教室』(岩波書店)が出版された。その他、恐竜の図鑑や本の監修、博物館展示・展覧会の監修を数多く手掛ける。現在、国立科学博物館 副館長・研究調整役、標本資料センター コレクションディレクター。OPAMでは「未知っち、見ちっち vol.2 Color & Science」(2021年12月)に登壇。

D

目隠しドローイング 触りながら描く

ウォーミングアップとして、袋に入ったモノを触りながら描く。これは貝殻だったので、意外と簡単だった。いよいよ本番。目隠しをし、[Hands on Works]より、井上雅之《SW-1720》《SW-1735》《SW-1731》《SW-1728》、横尾哲生《ツバキ》《ケヤキ》《クワ》《イチョウ》《リグナムバイタ》、青木美歌《Tiny essences'12》《Tiny essences'13》《Tiny essences'14》《Tiny essences'15》《Tiny essences'16》《Piece of genetic trip》を触る。どれを描くか決めたら、布の下に隠し、目隠しを取る。ときおり目をつぶり、作品を触ることだけに集中した。指と鉛筆を一緒に動かしながら、ドローイングを行った。

描いた作品と触った作品を見比べる。形だけでなく重さや温度を感じてみると、描き方も変わり、普段使わない感覚が目覚めた。

E

触覚ドローイング "感じ"を描く

モチーフはフウセントウワタとホオズキ。この植物を触った感じを描く。ウォーミングアップは、指で描く、筆で描く。指で描くのは不自由だが、視た感じがそのまま描けるような気がする。筆で描くと、自由に線が描ける気もするし、なんだかもどかしい気もする。指でじかに描いたときと道具を使ったときの、感覚の違いを確認した。

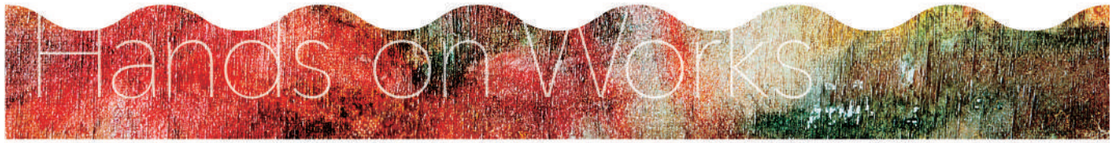
すでに視て描いたので、どんな形かはわかっているが、極力、形を忘れて、触り心地を確かめる。チクチク?ザラザラ?硬い?柔らかい?など、感じたことを色と形に置き換える。カラーインクを使い、脱色するためのハイターも試した。

感じたことを描いた画面はそれだけでも独特だが、トリミングすることで、また新たな画面ができる。L字の紙を2枚使うトリミングは、選ぶという行為で自分の画面をつくることだ。この方法を知ると、続きは自宅で行おうと気持ちの入る参加者もいた。

「眼で触る」

—朝のおとなの1010講座・夜のおとなの金曜講座—

今年度、[Hands on Works]の眼で触るシリーズに新たに加わった、川島逸郎の標本画《クマゼミ幼虫の抜け殻》(Vol.2 p12参照)、矢島由佳《変形菌》、木島隆康のテンペラ画《カブトガニ》《アカニシ》《烏瓜》を、「夜のおとなの金曜講座」で初めて紹介。「朝のおとなの1010講座」では、西洋美術と日本美術における細密表現のレクチャーを行った。



ワクワク・ドキドキと出会うために

deai WakuDoki

近年、学校教育では美術の年間授業時数が減り、さらに子どもの減少に伴って、美術を専門とする教員の数も減っている。美術教育の現場では、描く・創る・表現する、そして鑑賞することが好きな生徒たちは美術部で活動し、美術部のない学校の生徒たちはコツコツと自分で美術活動を行うことになる。美術は感性を育て、生きる力を強くする上で重要だ。だから美術館は新たな発見や刺激を発信したい。美術館は作品と出会う場所。そこで自分なりのモノの見方ができると、作品を視るのが楽しくなり、日常も生き生きとしてくる。そうすれば美術館が驚きと出会う場所になるだろう。美術との出会いの場は、美術館とは限らない。モノとの出会い、コトとの出会い、そしてヒトとの出会いにも、美術との出会いが多く存在する。日常には美しいモノやコト、不思議なモノやコトもいっぱいだ。そんなさまざまな出来事を、真剣に美術作品で表現しているアーティストがいる。個人や学校だけではできない、特別な出会いの機会について紹介したい。

アーティストとの出会い

美術館に来るのが難しい子どもたちのところへ、こちらから向かう「出前ワークショップ」は、「体感型ワークショップ」「絵の具ワークショップ」「工作ワークショップ」「鑑賞型ワークショップ」の4種類。圧倒的な量と質、そしてダイナミックな活動によって身体と感覚を刺激し、遊びながらの美術体験で新たな視点、自分の視点を作り出し、それが各自の美術につながるようにと行っている。このワークショップを、地域と美術館を往還させた活動に展開しているのが「びじゅつかんの旅・旅じたく」だ。今年度は、アウトリーチ活動である「出前ワークショップ」「びじゅつかんの旅・旅じたく」の中で、なかなか直接会うことが難しいアーティストとのワークショップ「アーティストとの出会い」を始めた。

絵の具にまみれる

新宅加奈子（美術家）

出前ワークショップ／佐伯市立切畑小学校

大分県出身・京都在住のアーティスト、新宅加奈子氏は全身絵の具だらけになるパフォーマンスを展開している。はじめに新宅氏が画像を使って自己紹介を行った。頭から絵の具を被る? そんなのが美術?と真剣に、目と耳を集中させた。

みんなもボディ・ペインティングに挑戦してみる。はじめは嫌がったり、恥ずかしがったりしていたが、一人が始めると、みんな率先してやり始める。とろとろしていた絵の具が、やがて体温で乾き、びび割れや剥離が起こる。自分の手が視覚的にも触覚的にも変化するのを楽しんだ。

新宅氏の新作《stratum（地層）at OPAM》を学校に運んで、間近で鑑賞。そのディテールに引き付けられる。今までに行ったパフォーマンスが化石化したようなものだという新宅氏に、子どもたちは自身の皮膚の表情を重ね合わせた。この新作はその後、JR大分駅との共同企画 “OPAM at Platform of Oita Station”で、3・4番線ホームの元喫煙所に展示した。

Artist Profile

新宅加奈子

1994年、大分県生まれ。京都造形芸術大学大学院 芸術研究科修了。京都府を拠点に、「生きていることを確認する行為」として2010年より全身に絵の具をまとうパフォーマンスを展開し、その行為をセルフポートレートとして国内外で展示。また展示会場では4時間絵の具をまとい続けるパフォーマンスを行うなど、写真作品やパフォーマンスを通して表現する。絵の具をまとうことは作家にとって「いまここにいる」という生の実感を得るための行為であり、皮膚の表面で変化していく絵の具は、自身が身体を持つ人間であることからも解放し、私という自己の感覚を拡張させる。「アジア新人アーティスト芸術祭」や「ヨコハマトリエンナーレ2020「AFTERGLOW――光の破片をつかまえる」」に参加し、パフォーマンス《I'm still alive》を発表。受賞歴に、「IAG AWARD 2020」奨励賞、「京都府新鋭選抜展」NHK放送局賞受賞（2020）、「アートアワードトーキョー 丸の内 2019」オーディエンス賞などがあり、国内外で注目を集めている。

海の生き物をつくろう

谷本めい（美術家）

びじゅつかんの旅じたく／ひがしこども園（豊後大野市）

[Hands on Works]に大分県の石から制作した作品がある、美術家の谷本めい氏。その作品群《海の生き物たち》を園に持参して、ワークショップを行った。海にはどんな生き物がいるか、谷本氏は子どもたちに問いかけ、それをクレヨンで描く。圧倒的な描写力に怖がる子どももいたが、いつしか谷本氏につられて一緒に描き始めた。

できあがった海の生き物を、谷本氏の作品と並べる。
次回の「びじゅつかんの旅」が待ち遠しくなった。

谷本氏の制作した《海の生き物たち》を触って鑑賞する。大分県内の石から彫り出した9つの生き物たち。一つ出すたびに驚きの声が上がる。

粘土で海の生き物をつくる方法を聞いたあと、外に出て、制作に使う材料・道具となる小石や枝を集める。制作が始まると、みんな静かに集中した。

後日、「びじゅつかんの旅」で子どもたちが美術館にやって来る。教育普及アトリエには「びじゅつかんの旅じたく」で視た谷本氏の作品《海の生き物たち》が、情報コーナーにはアンモナイトや植物の化石の作品が並び、みんなを出迎えた。

グループに分かれ、企画展「ポケモン化石博物館」を鑑賞する。ポケモンと古生物の骨格はどう違う?カセキポケモンのアマルルガ骨格想像模型と古生物アマルガサウルスの全身骨格標本を見比べた。ティラノサウルスの口の中を恐る恐るのぞき込み、ガチゴラスの骨格想像模型の正面に立つと迫力に驚いた。

Artist Profile

谷本めい

1991年、東京都生まれ。東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 絵画専攻壁画修了後、ポーラ美術振興財団在外研修員としてトルコアナドール大学へ留学する。モザイク壁画制作のため、方解石からテッセラをつくる中、石を彫る楽しみをさらに模索し、東京藝術大学大学院 美術研究科博士後期課程でモザイク画と彫刻の融合をはかり、2022年、修了。「どんな石でも彫れない石はない」と制作中。OPAM教育普及教材[Hands on Works]として、豊後大野市や日田市をはじめ、県内の石や多種多様な大理石から制作した《海の生き物たち》《アンモナイトの化石I》《アンモナイトの群》《植物化石標本》がある。

石に描く × 一緒に視る

佐野 藍（彫刻家）

びじゅつかんの旅／にしきこども園（中津市）

「びじゅつかんの旅じたく」で「積み紙の街」(p.20)を行った園児たちが、美術館にやって来る。たっぷり3時間半かけて、彫刻家・佐野藍氏を講師に、鑑賞と制作を行ったり来たりするワークショップを行った。

子どもたちを、佐野氏がつくった幻獣の作品が出迎える。アトリエ内では過去の作品の画像を天井から吊るし、今日のために神奈川県のアトリエから持参した《ピンクドラゴン》とOPAM教材[Hands on Works]からドラゴンの赤ちゃん《アルビオンの民 ―水辺―》《Python022》を視る。作品のつくり方も動画で見た。

お昼ご飯を食べたあと、企画展「大本山 相国寺と金閣・銀閣の名宝」を鑑賞。何か気になったことをあげながら、展示室をめぐる。円山応挙《牡丹孔雀図》では孔雀の羽に見とれ、伊藤若冲《中鶏 左右梅図》では「ソフトクリームみたい」と進んだ。

展示室からアトリエに戻ったあと、佐野氏の作品制作の際に出た石のかけらを、思い思いのドラゴンや恐竜に変身させていく。好きな大きさ・カタチのカケラを選び、上から横から斜めから、じっくり視て、どこに目を描くか、口はどこにするかを決める。油性ペンでカラフルなウロコ模様を描いた園児もいた。
完成した作品を《ピンクドラゴン》と一緒に並べた。

Artist Profile

佐野 藍

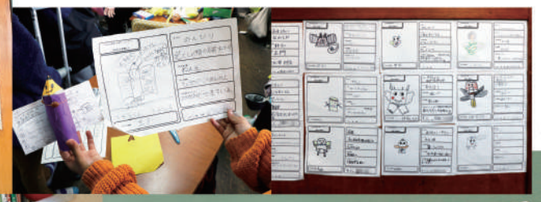
1989年、東京生まれ。2016年、東京藝術大学大学院 美術研究科彫刻専攻修了。幼いころ茂みの奥で見つけたニホントカゲの存在に心を奪われ、以来、爬虫類やドラゴンなど「幻の存在」である幻獣の絵を描く。その後、大理石の持つ神秘的で強い存在感と幻想的な雰囲気に惹かれ、脳の中に漂うもの、幻の存在を自分の目の前に強く具現化させてみたいと、神話や伝説に登場する幻獣やドラゴンをモチーフに彫刻を行う。2017年「驚異の超絶技巧 明治工芸から現代アートへ」に取り上げられ、三井記念美術館、岐阜県現代陶芸美術館、あべのハルカス美術館を巡回。様々な柄、色の大理石で彫られるペルソンシリーズは、石を見ながら模様を探っていくようなライブ感の伴う方法で、蛇を彫るというよりも、石との対話となるという。OPAM教育普及教材[Hands on Works]として、佐伯市の石灰岩からつくられた《Python022》は全体が白く、イタリアの大理石で彫られた《Python023》はグレーの色が混ざる。つくり込んだ鱗、磨き上げた石肌は、本物を触った時のそれにそっくりである。また最も得意とする〈幻獣〉シリーズの作品から、豊後大野市の石灰岩でつくられた《アルビオンの民 ―水辺―》は、寝ぼけているような赤ちゃんドラゴンの眼、そして肉球が愛らしい。OPAMでは、特別ワークショップ「触ると触れる～ハンズオン」(2019年3月)、「未知っち、見ちっち vol.2 Color & Science」(2021年12月)に登壇。

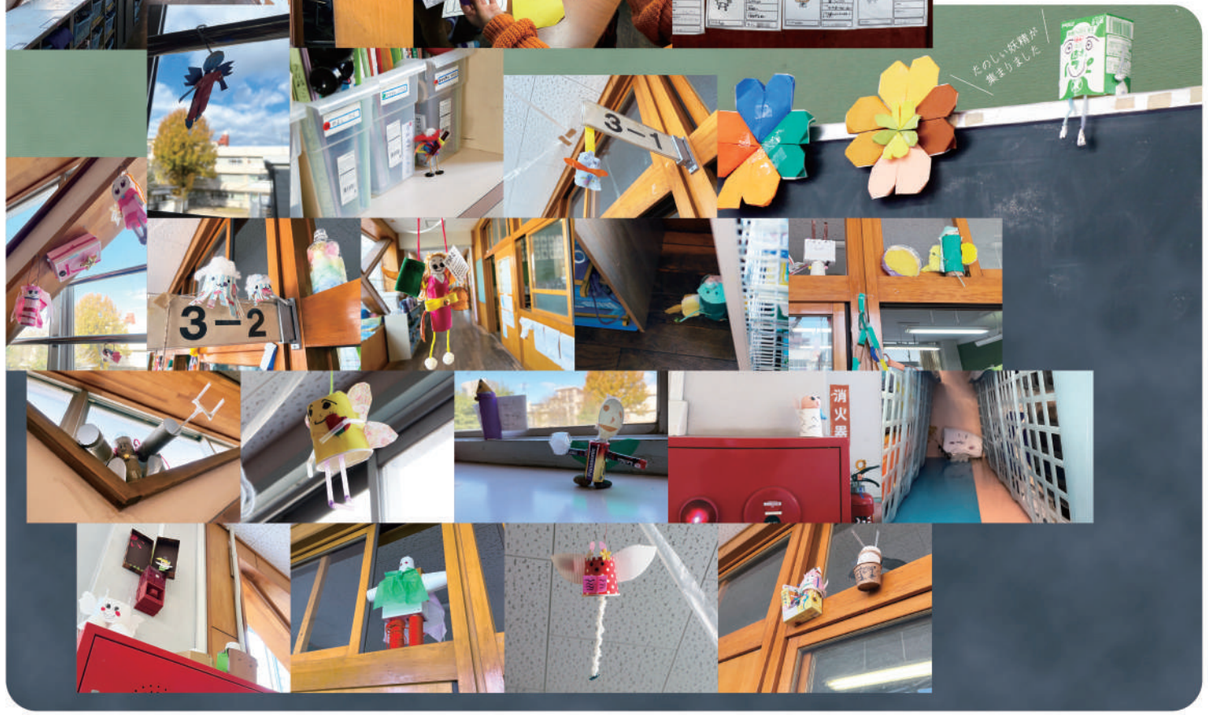
妖精との出会い

金池小に住んでいる妖精たち

出前ワークショップ
大分市立金池小学校

別れは想像と創造を生み出す力となる。そして別れは出会いの始まりでもある。大分市立金池小学校が新校舎を建てた。移設に伴い、想い出の校舎を使って何かワークショップをしたいとPTAから相談があり、妖精と出会うワークショップ「金池小に住んでいる妖精たち」が実現する。今まで校舎に住んでいて、みんなを守ってくれていた妖精さんが姿を現した。そんな物語のもと、想像力と創造力を使って妖精をつくり、廊下に展示した。





1日目

3年生全員を対象にオリエンテーション。妖精ってどんな存在? みんなで想像しよう。あわせて材料やつくり方の話をした。

2日目

制作は各クラスで行う。どんな感じでつくっているか、様子をのぞくと、筆記用具をはじめ身の回りのモノが妖精になっていた。

3日目

完成した妖精を廊下に展示。生態図鑑には特技や好きな食べ物も書いた。

作品との出会い

美術館には本物の作品がある。作家が描きたい、創りたい、伝えたいと真剣に想い、一生懸命創った作品だ。この作品たちに、ぜひ、出会ってほしい。何か特別なことを感じるかも知れない。なんとなく気になる作品があるかも知れない。自分でも作品を創りたくなるかも知れない。作品との出会いには、新しい何かが待っている。

美術館で作品を見るギャラリーツアーのスタイルは、「一緒に視る」。ガイドスタッフとともに、文字通り、作品を一緒に視てめぐる。ここでは丁寧に作品を視ていくことを、一番大切にしている。解説型ツアーと違い、一方的な作品の解説はなく、また対話型鑑賞のように、意見をあえて引き出すファシリテートも行わない。一緒に展示室をめぐると、自然と作品について話をする場合もあれば、視るだけで静かにめぐる場合もある。その中で独自の視点ができあがり、次の来館へとつながってほしい。

小4ミュージアムツアー

開館翌年から始まった小4ミュージアムツアーは、今年度からは「ミュージアムを活用した子どもの感性育成事業」として、大分県教育委員会とともに実施している。主に県内の小学4年生を対象に、コレクション展でガイドスタッフとギャラリーツアー「一緒に視る」を行うプログラムだ。

コレクション展I〜IIIで計24回・736名(2023年1月現在)の子どもたちが来館した。この小4ミュージアムツアーをきっかけに、一人でも、あるいは家族と、友人と、美術館を楽しんでほしい。

コレクション展示室では作品に近寄ったり、離れたりしながら丁寧に視る。1階アトリウムにあるマルセル・ワンダース《ユーラシアン・ガーデン・スピリット》は、新型コロナウイルス感染防止対策のため、しばらく触れなかったので、触れるようになって大人気。3階ホワイエの作品は、片目で視ると手の上に乗せたり持ったりしているように感じられる。

びじゅつかんの旅

学校や園の子どもたちが美術館を訪れる「びじゅつかんの旅」でも、自分の目で作品を視るギャラリーツアー「一緒に視る」を行っている。小4ミュージアムツアーと違うのは、対象年齢を問わないことだ。旅には旅じたくがつきものということで、「びじゅつかんの旅じたく」も行っている。旅の前に教育普及スタッフが学校や園を訪れ、身体と感覚を活性化させる美術体験ワークショップだ。子どもたちは事前に美術館のスタッフと仲良くなっていると、旅が待ち遠しくなるだろう。

地域美術館体験講座

毎年、美術館への来館が難しい地域に作品を持っていく「地域美術館」の中で、地域美術館体験講座としてギャラリーツアー「一緒に視る」を行っている。今年度は臼杵市歴史資料館と臼杵市観光交流プラザの2会場で、地域美術館を開催。コレクションの中から「臼杵の美術家や風土」と題して、臼杵市出身の作家たちの作品や、市内の風景を描いた作品、そして臼杵市がユネスコの食文化創造都市に認定されたことにちなんで、身近な食べ物を題材にした作品を展示した。

第一会場となった臼杵市歴史資料館の企画展示室では、市内の中学1年生と小学3年生を中心にギャラリーツアー「一緒に視る」を実施し、27回・673名の子どもたちが訪れた。

福田平八郎《桃》は、まるで食べられそう。首藤雨郊《港町風景》は、隅から隅まで見ていくと90年前の生活がわかる。日名子実三《ギターを持てる女》は裸で不思議だけど、ポーズをまねてみる。江藤純平《オリーブと海》は、まさか臼杵の海じゃないよね。思い思いに作品を楽しんだ。

先生のためのワークショップ

先生も本気で楽しもう!

先生のための講座は、先生自身が能動的に作品を視て、心が躍れば、その楽しさは子どもたちに伝わると、開館当初から行ってきた。例えば小学校の図画工作で、立体作品をつくる場合、身近なモノや扱いやすい(加工しやすい)モノを使うことが多い。もちろん美術館でもそういった材料を使うこともあるが、その場合は視点を変えてみるのが目的の一つとなる。また想像力を刺激するため、ときには水晶の結晶や金箔など特別なモノも使う場合がある。そして制作の成果物だけでなく、制作過程も大切であり、空間や時間の中にも美術体験が生まれるので、「視る」「感じる」ことから「作る・造る・創る」ことまでを美術体験として行い、想像と創造を発展させるワークショップを開催している。先生のためのワークショップでは、その実践を先生に体験してもらう。ここで一番大切なのは、先生たちが真剣に参加し、自らの身体と感覚を刺激することだ。そのまま授業でも取り入れることができる、あるいはヒントとなるようなワークショップを行っている。

Zoom配信によるワークショップ

第67回大分県造形教育研究大会 大分大会 幼保こども園Zoom配信

「美術館の楽しみ方・身近な素材を使った造形遊び」をテーマに、「わくわく・やってみたい心を育む造形遊び」をサブテーマに、大分県の幼稚園・保育園・こども園の先生を対象にしたZoomによるワークショップを行った。当初はコロナ対策のためリモートによる講演を依頼されたが、一方的に美術館から話をするだけでいいのかを考えた。本来なら対面で直接ワークショップを行いたい。そこでアクションや双方的な意見交換も取り入れようと、進行を担当者と一緒に考える。最初に子どもだけが作品を視ている姿を映し、自分の目で視る楽しさと大切さを話す。その後、参加者が見る・聞くだけでなく、できるだけ気軽に発言できるように、司会者がインタビュー形式で進行を務めた。まだ検討の余地はあるものの、新しい形のワークショップが見えてきた。

幼保連携型認定こども園 新規採用保育教諭研修

こども園の先生になりたての、新任先生のための研修会。前半は新聞紙を使ったワークショップ「くしゃくしゃポイポイ」を実施。後半はコレクション展示室で、子どもたちと行うギャラリーツアー「一緒に視る」の説明を聞きながら、ときには子どもの気持ちになって作品を視た。

幼保連携型認定こども園 中堅保育教諭等資質向上研修

身体を動かしながらワークショップを体感。「ぱたふわ」を行い、紙の触感の変化を体験した。展示室では、子どもたちと同じ目線に立って作品を鑑賞。同時期に開催していた教育普及活動展示「びじゅつって、すげぇ! 2021-2022のワークショップから」も見ながら、当館の活動について幅広く知ってもらった。

テーマ別研修「美術館・埋蔵文化財センター活用研修」

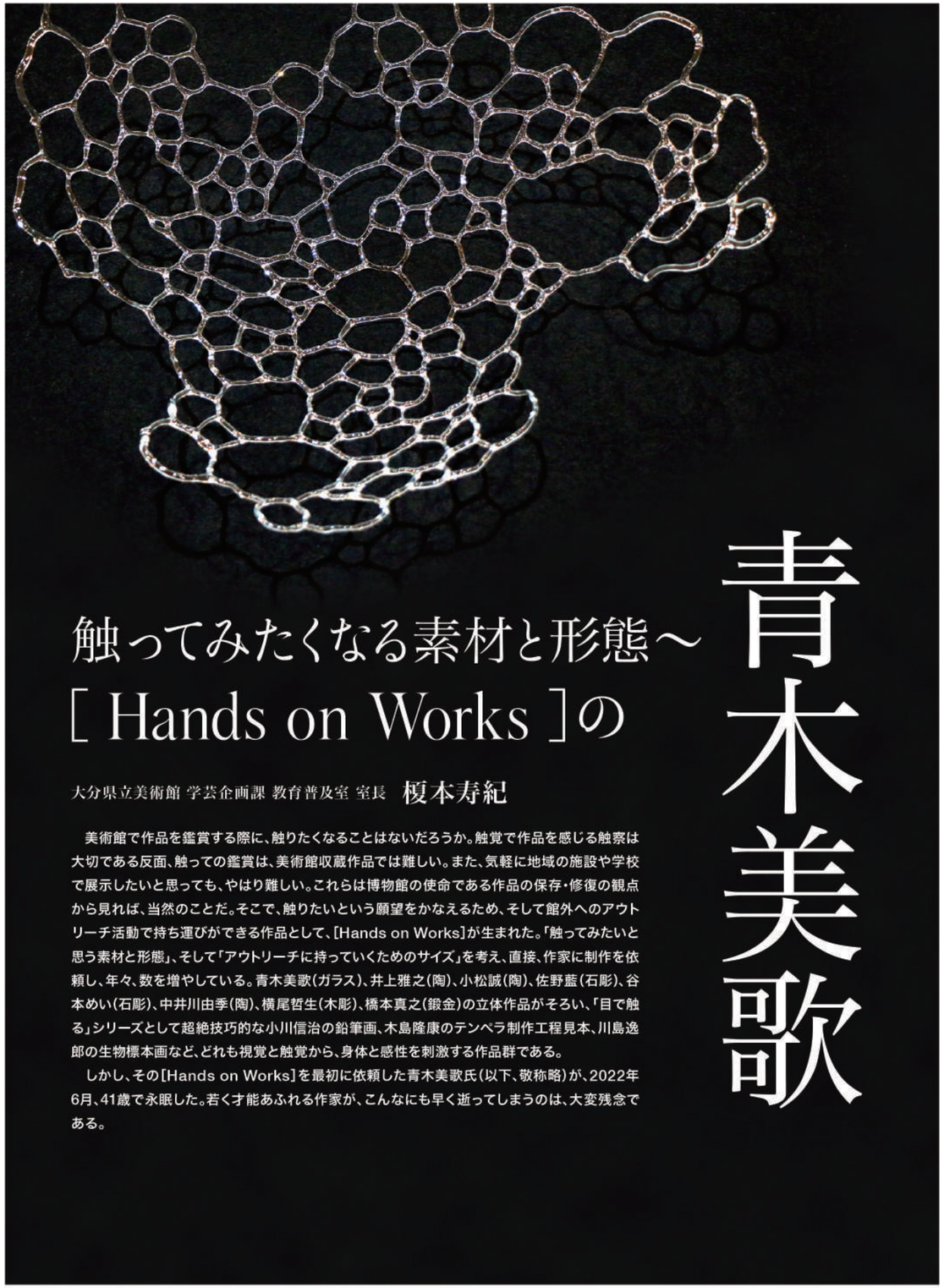
自分の名前をローマ字で書き、建物に形を変えていくワークショップ「名前の街」で手を動かす。教材ボックスを紹介し、触る教材[Hands on Works]から青木美歌の作品群を、視覚と触覚で鑑賞した。

ステップアップ研修

大分県教育委員会の主催による、教員2年目を対象とした研修。体感ワークショップ「ぱたふわ」を行い、コレクション展示室へ。「一緒に視る」で丁寧に作品を視ると発見につながるという話をした。見覚えのある顔が…と思ったら、開館初年度に大分大学教育学部の授業で来館した学生が、教員になって参加していた。彼らは授業で来館、教員研修で来館、プライベートでも来館している。これからは子どもたちと一緒に来てほしい。

先生のためのワークショップ アウトリーチ・タイプ

美術館やアーティストがワークショップを行い、その様子を先生たちに見てもらう。その中で、作家と生徒との関わり合いや美術の広さ、そして作家の情熱を感じてもらいたい。教育普及の教材[Hands on Works]に作品がある佐野藍氏によるワークショップを見て、感じたことを話し合う先生のためのワークショップを行った。午前中は6年生と幼稚園児を対象に、作品を視る・触る。午後は全校児童を対象に、作品を中心にして木っ端・石・紙コップなどを積み、ロウソク照明を点灯。幻想的なドラゴンの住む遺跡(ラビリンス)をつくった。ワークショップの実践を見学し、放課後にワークショップの意義や流れを解説しながら先生からの質問も受ける。併せて、全校児童と行った出前ワークショップ「壁画作戦 海の生き物を描こう!」(p.22)との比較から、美術教育の可能性を検証した。



青木美歌

触ってみたくなる素材と形態～[Hands on Works]の

大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室 室長 榎本寿紀

美術館で作品を鑑賞する際に、触りたくなることはないだろうか。触覚で作品を感じる触察は大切である反面、触っての鑑賞は、美術館収蔵作品では難しい。また、気軽に地域の施設や学校で展示したいと思っても、やはり難しい。これらは博物館の使命である作品の保存・修復の観点から見れば、当然のことだ。そこで、触りたいという願望をかなえるため、そして館外へのアウトリーチ活動で持ち運びができる作品として、[Hands on Works]が生まれた。「触ってみたいと思う素材と形態」、そして「アウトリーチに持っていくためのサイズ」を考え、直接、作家に制作を依頼し、年々、数を増やしている。青木美歌(ガラス)、井上雅之(陶)、小松誠(陶)、佐野藍(石彫)、谷本めい(石彫)、中井川由季(陶)、横尾哲生(木彫)、橋本真之(鍛金)の立体作品がそろい、「目で触る」シリーズとして超絶技巧的な小川信治の鉛筆画、木島隆康のテンペラ制作工程見本、川島逸郎の生物標本画など、どれも視覚と触覚から、身体と感性を刺激する作品群である。

しかし、その[Hands on Works]を最初に依頼した青木美歌氏(以下、敬称略)が、2022年6月、41歳で永眠した。若く才能あふれる作家が、こんなにも早く逝ってしまうのは、大変残念である。

[Hands on Works]として教材を構想する中、青木の個展「あなたに続く森」をポーラミュージアムアネックス(東京・銀座)で見た。連作による作品群を見た瞬間、身体の奥深くをくすぐられるような感覚を得た。それはまさしく触りたい、あるいはそっと触れたいという思いである。青木の作品の特徴は、制作におけるイメージとモチーフ、そして素材と技法が、融合した表現である。しっかりとした命の形や、触れると壊れてしまいそうな繊細な作品など形態はさまざまで、その明確なイメージが個々の作品に微妙な形として表現されている。青木の作品のイメージ・モチーフ・素材、そして何よりその多様性が、出会う多くの人に触りたい・触れたいという気持ちを抱かせるのではないだろうか。

そんな思いから、当館の触る・触れる教材[Hands on Works]の第一号にしたいと考え、教材制作の依頼のためにアトリエを訪れたのは2017年の春だった。教材[Hands on Works]の趣旨(作品を触覚で体験する・アウトリーチに持参する)を説明すると、一般の人に触覚で作品と出会うこと、そしてアウトリーチで地域の子どもたちに直接作品を持って出かけることに興味を示し、制作依頼はすぐに快諾を得た。しっかり触っても壊れそうにないモノと、いかにも繊細なモノの両方を、サイズと個数を含めて検討してもらうことにした。各種講座で制作方法を説明するためにもアトリエでバーナー・ワーク(バーナーの炎によりガラスを溶融し成形する作業)を見せてもらう。「私のやっていることは、誰でもできる簡単な技法」と青木は言い切るが、ガラス管をバーナーで炙り、溶解したガラスを接合していく迷いのない手技に、確固たるイメージがあってのことだと感じた。

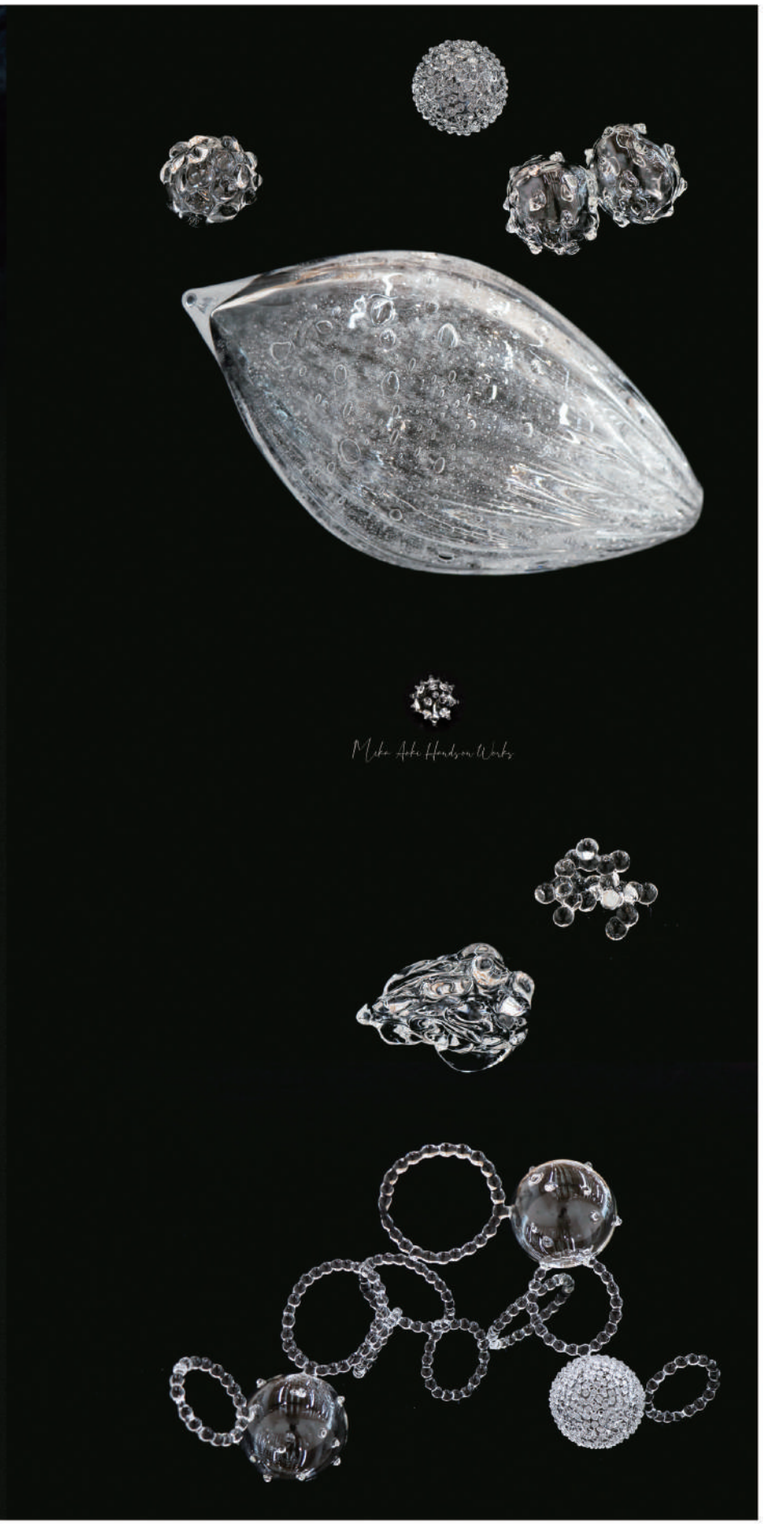
青木美歌の ワークショップ・レクチャー

[Hands on Works]の制作と同時に、植物をテーマにした、植物学者や歴史研究家など7名による連続講座「植物をめぐる7つのお話」の一つを青木に依頼し、2018年3月、当時留学していたアイスランドからのスカイプによるワークショップ・レクチャーを行った。タイトルは「素材と造形・命の繋がりを求めて」。アイスランドでの生活や現在の制作活動についての話は面白く、特に「ガラスを見ながら、対話をしているような感じで制作している」「つくりながら決めていく」という話は、作家にとっては当たり前のことでも、多くの参加者にとっては未知のこと。みんな興味深く集中して、画面の向こうの青木を見つめ、耳を傾けた。一方、青木も、あらためて自身について振り返る機会になったと喜んでいた。帰国後、青木は個展や東京都庭園美術館での企画展に参加し、活躍していく。この頃、青木の作品《Fiuid'4》が[Hands on Works]に加わり、教育普及の活動も一層幅が広がった。それは生命の源である水の循環をテーマにした作品だった。

その後、2020年12月、分野横断型のワークショップ・レクチャー「未知っち、見ちっち 科学者と表現者」を開催した。対談形式のレクチャーで、その相手は国立科学博物館で菌学を専門としている細矢剛氏(以下、敬称略)。青木は病院からのスカイプとなったが、菌について、作品について、異色の対談が実現した。かねてより細矢の本を読み、研究者としての細矢を知っていた青木は、最初、少し緊張気味だったが、菌類と作品について色をテーマに話が弾んだ。透明ガラスを使うことについて、青木は「存在感を出さないまま、存在できるようなことを目指しています」と述べ、対して細矢は「環境に溶けているようなものですね」と返答する。最後に細矢から、生物の相互作用をテーマに作品をつくったら面白いのではと提案があった。青木の次の作品の展開につながるかも知れない。作品をつくるインスピレーションが湧いてくる、と青木は終始笑顔で真剣なまなざしだった。

青木の作品は「触(さわ)る」と「触(ふ)れる」という、触覚の中でも強さ、壊れやすさ、繊細さなど、ガラス素材の特徴を最大限に生かしている。視覚と触覚を行ったり来たりしながらの鑑賞は、人間の感覚を研ぎ澄ましながら、感性を研ぎ澄ますことにつながる。美術館では「朝のおとなの1010講座」「夜のおとなの金曜講座」、そして視覚と触覚をテーマにした特別ワークショップ「触ると触れる」で、作品を紹介している。どの講座でも、貴金属をはずし、手を洗ってから触るのはもちろんのこと、「世界にたった一つしかない命に優しく触れる感覚を大切に」と触覚で作品と出会う。それは子どもを対象にしたアウトリーチでも同じだ。子どもも大人も年齢に関係なく、青木の作品を見た瞬間、思わず「きれい」と声が出てしまい、驚きの表情は隠せない。大きな作品は形を手で確かめつつ、ガラスの気泡や穴の内、そして方向によっては万華鏡にも見える反射を楽しむ。小さな作品は両手で優しく包み込むように持ちながら、そっと顔に近づけて見る。今年度のアウトリーチ(出前ワークショップ)では、作品の鑑賞に加えて、身近な命の形として校庭でタネや花びら・枝などを採集し、スコープで観察。色紙を使ってそれらの植物から作品をつくり、青木の作品と一緒に並べた。高学年のワークショップでは、ガラスを素材とした工業製品とともに作品を触ったあと、ガラスの原料の一つである水晶、さらにビーチグラスや校庭の石を組み合わせて、妖精をつくる。最後は青木の作品と一緒に並べ、妖精の世界を楽しんだ。

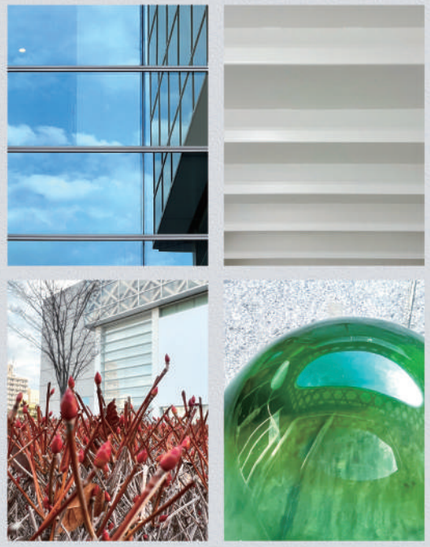
作品を制作した作家と直接会うことは少ないので、実は青木本人にも、2022年3月にワークショップを依頼しようと考えていた。日田市大原八幡宮で毎年行われる神事「米占い」に合わせて、青木の作品、「米占い」に派生する菌類、そして羊毛を素材としたワークショップを計画したが、青木は体調を崩して来県できず、残念ながら本人の代わりに美術館スタッフが実施した。



命の営みと繋がりへの思い

アウトリーチを始め、多くのワークショップで、青木の作品はさまざまな人たちと出会っている。ワークショップ参加者の表情を見れば、作品に魅了されていることがわかるだろう。この表情、眼差しこそが、当館の教育普及活動がめざす「身体と感性を刺激することで好奇心を触発し、能動的な視線を獲得していくこと」に繋がっていく。今後も青木の作品をはじめ、増えつつある[Hands on Works]を持って、地域に赴きたいと考える。しかしそれだけではない。この大分県立美術館が収集する教育普及独自の教材は、当館の所蔵作品と一緒に展示することをきっかけに、全国へ展開し、他館の所蔵作品とともに展示して、さらなる美術体験を誘う可能性を秘めている。それは美術作品のみならず、他分野との融合を果たしている当館の活動からも想像できるだろう。例えば青木の作品と植物を、水、あるいは命をモチーフとした作品と隣り合わせで展示してみてはどうだろう。その作品がまったく異なる表現方法である場合、鑑賞者は戸惑いながらも、美しい対となった作品に目を向け、自分なりの視方を探す、能動的な視線を促すきっかけとなる。そして、その展示は大きな物語を語り始めるだろう。

大分県立美術館教育普及は、青木の作品とその意思を、次世代へ引き継ぐ役目を担っている。青木美歌という美術家が生涯をかけテーマとした「命の営みと繋がり」への思いを、今後も作品と出会う人たちへと繋げていきたい。



びじゅつって、すげぇ! 2022-2023
Vol.1　美術で遊ぶ、美術館。

企画・制作・発行
公益財団法人 大分県芸術文化スポーツ振興財団

事務局
大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室
大分市寿町2番1号　TEL.097-533-4502

執筆
榎本寿紀　大分県立美術館 学芸企画課 教育普及室 室長

編集協力：ラルゴ　井上裕子
デザイン：ディ・エア　佐々木ツヨシ
印刷：株式会社 明文堂印刷

2023年3月発行
※本誌に掲載した記事・写真・イラスト等の無断転載は禁じます。

文化庁
令和4年度 文化庁 Innovate Museum事業